

日時： 2021年6月29日（火） 18:30~20:00

講師： 北村 紗衣氏（武蔵大学准教授）

会場： ZOOM ウェビナー

第83回ジェンダーセッションは、武蔵大学准教授の北村紗衣氏をお招きし、ウィキペディアのジェンダーバイアスについてお話いただきました。今日、ウィキペディアは調べものをする際に日常的に用いられており、大学の授業や課題にあたって同サイトを見る学生も少なくないことでしょう。しかし、北村氏はウィキペディアを簡単に信じないように呼びかけます。ウィキペディアには「検証可能性」「中立的な観点」「独自研究は載せない」という三つの方針があり、さらに信頼できる複数の情報源で一定程度言及されていないと項目を立てることができない「特筆性」というルールもあります。これらは客観的で公平な百科事典であることを目指すための方針といえます。ところが、「中立的な観点」が両論併記を重んじるあまり、誤っているとみなされるような考えでも掲載が許容されてしまうように、非専門家のボランティアで成り立つウィキペディアには、構造上の問題があります。

これに加えて北村氏が重要な問題点として指摘するのが、女性エディターが全体の1~2割程度であることです。その結果、女性に関連した記事は、単に数が少なく分野に偏りが生じているだけでなく、マジョリティの男性エディターにとって興味関心が薄いゆえに、「特筆性」の基準を満たしていないと判断され、削除される傾向にあるといえます。その一つとして、ご講演では女性科学者の事例が詳しく取り上げられました。例えば、高度に専門的な業績を残していても、メディアが中央の大学の男性科学者ばかりを取り上げ、地方大学の女性科学者を軽視すれば、出典として参照できる情報源が少なくなり、「特筆性」に抵触する可能性が生じます。また、同じような業績があっても、女性科学者の記事には「若くて見た目がよいからメディアで注目されている」などの不当で性差別的な意見とともに削除依頼がなされ、男性科学者は不問にされるなどの事態も起きています。日本版ウィキペディアでも声優やアイドル、AV女優などの記事が多いのに対し、学者や芸術家の記事が少ないなどの問題があります。こうした状況の対策として、ご講演では「Women in Red」や「Art + Feminism」など、現在、女性に関する記事を増やすために行われている改善の取り組みが紹介されました。そして、フェミニスト批評的な観点から、どういう記事があるのかということより、どういう記事がないのか、ないものに対する想像力を働かせることが重要であると締められました。

ご講演後には視聴者から寄せられたたくさんの質問にお答えいただき、Q&Aを通じて、ウィキペディア内の英語中心主義や人種的なバイアス、またトランスジェンダーに対して出生時の氏名が優先的に記載されるなどの問題点が指摘されました。最後に北村氏は、百科事典は社会の鏡であるがゆえに、社会にジェンダーバイアスがある限り、ウィキペディアからもジェンダーバイアスはなくなると語ります。その一方で北村氏は、デイドロの『百科全書』のあとに『ブリタニカ百科事典』が創刊されたように、百科事典は時代にあわせて刷新されていくものであり、いつかウィキペディアを超えるような百科事典が現れることを信じているとも語られました。学生にとっても身近なウィキペディアを通じてジェンダーについて考える機会を与えてくださった北村氏に、心よりお礼を申し上げます。

